



恋人に振られてしまった私を
優しくて不器用なセクサロイドが
甘やかしてくれるはずだったのに
思わぬ独占欲が芽生えてしまったので
激しく求められてしまいました

体験版（二部抜粋）

恋人に振られてしまった私を、優しく
て不器用なセクサロイドが甘やかして
くれるはずだったのに、思わぬ独占欲
が芽生えてしまったので、激しく求め
られてしまいました

河合あひる

したあとは、清らかな風が身体のなかをめぐっているような気がする。

仕事を超絶ブラックでも、モラハラ上司の対応で疲れ切っているけど、毎週金曜日の夜に彼のアパートへ向かえば、すべてを忘れることができる。

彼——尚也はいつも私のために料理をつくってくれる。メニューは、たいいてい武骨な肉料理。たまにカレーライス。どれも彼の好物で、彼が好きなのは私も好きだ。夕食をともにしているあいだ、彼は私の話にじっと耳を傾けている。新しい部署に異動してからは、仕事の愚痴ばかりになってしまったけれど……尚也は嫌な顔ひとつせず最後まで聞いてくれる。

「今週も大変だったね。お疲れ様」と優しく頭を撫でながら。私にはもったいないくらいにの理想の恋人だ。

食事が終わると「じゃあ、先に入るから」と彼は浴室へ行く。ほどなく水の音がして、私はその水が彼の身体を流れると流れていくのを想像する。爽やかな黒髪、少し彫りの深い顔、厚い胸、広い背中、薄く贅肉のつ

いたお腹、そして……私は自分の下着が濡れているのに気づく。

彼のあとに、私もシャワーを浴びる。そのあいだ彼はベッドに腰をかけて、じっと私を待っている。部屋の電気を消して、枕元の照明をつける。オレンジの優しげなひかりのなかで、私たちは身体に触れあう。まるで儀式のような、同じやり方、同じ手つきに安心する。息づかいが次第に熱を帯びはじめ、かすかな身体の震えのひとつひとつで、私たちはお互いが何を求めているのかが分かる。私が先に絶頂すると、彼がたまらずに私の中に熱を吐きだす。スキン越しでも、彼のものがびくびくと跳ねているのが伝わる。私はそれを締めつけて彼の形を味わう。

そのあとは、ゆるく触れあったり、映画を観たり、コンビニにケーキを買いに行ったり……そうやって、いつも通りに過ごすはずだった。

「……もういいかい」

でも、その日は違っていた。彼はスキンを付け替えて、再び私の中に入

った。

「あっ……まっ……」

まだ快楽の余韻が残っている膣を、彼は抉るように突いた。私の脚を割るように大きく開いて、奥へ奥へと腰を進める。私が「恥ずかしいから」と顔を隠すと、彼はその腕を退け、痛いくらいにベッドに押さえつけた。今までの彼では考えられないほどの野性的なセックスに、私は驚き、そしてひそかに興奮していた。

「あっ……ちよつと、どう、したの……？」

彼は囁みつくように私の唇を塞ぐ。喘ぎ声ごと舌を絡めとられ、うまく息ができずに、頭がぼうつとしてくる。

（……苦しい）

目の前が真っ暗になりかけたそのとき、彼は唇を離れた。「はっ、はっ」と短い息を吐き、髪の毛に汗が伝っている。まるで水の中にもぐっていた

かのようにだった。

「ごめん、俺はまだ足りないの。もうちょっと付き合って」

そう言いながら、彼は自分の乱れた髪の毛をかきあげる。獣のようなまなざしで私を射抜き、角度を変えて私の中を何度もつらぬいた。歯車同士を無理に噛みあわせているような違和感があったが、ふたたびずくずくと疼くような気持ちよさがこみあげてくる。

「はあ……はあ……♡」

膣がまた、彼のものを締めつけて、ぎゅっと搾り取ろうとする。彼は苦しげな顔をしながら、私を見つめる。腰の動きが緩慢になって、ピストンが途切れ途切れになる。

「そんなに、しめないで……」

彼は小さなうめき声とともに、精を吐いた。その静かな震えを受けとめて、私も二度目の快楽の波に身を投げだした。

「二回もするって、珍しいね」

そう声をかけながら、私は冷蔵庫を開けた。なかはいつもきれいに整頓されていて、どこに何が入っているか、すぐに把握できる。ペットボトルのお茶を二本取り出し、片方を尚也に渡した。彼はベッドの中で神妙な顔をしながら、「さあ。なんかしたくなつて」とペットボトルのお茶に口をつける。喉仏が艶やかに上下する。唇を拭いながら、こう口火を切った。

「あのさ、明日、どっか出かけない？」

「ん？」私は少し身構えた。場所によっては断ろうと思っていた。「どこ？」

「桜、見に行こう。ことかさ。屋台も出てるみたいだよ」

彼はスマホの画面を私に向ける。桜で有名な公園の写真だ。花見なんていつぶりだろうと一瞬迷ったが、私は首を横にふった。人出の多いところへ行くのはつらい。

「ごめん。土日はちょっとやることがあるから……」

「そう」彼の声は沈んでいた。「なら仕方ないね」

「うん。ごめん。家事とか全部やっておきたくて」

仕事終わりに家事をする気力がないため、週末に全てを後回しにしている。掃除はもちろんのこと、料理は五日分を作り置きして冷凍する。はじめは洗濯こそこまめにやっていたが、徐々に面倒臭くなり、土曜日に一気に片付けことにしている。そして日曜日はなるべくぼうつとして気力を養う。またゆううつな月曜日が始まるけれど、金曜日のこの時間があるから耐えられるのだ。

私は彼と一緒に話題の映画を観ようと思い、テレビをつけて、映像系のサブスクリプションを開いた。検索窓に文字を入力していると、彼が「ねえ」と低く呟くように呼んだ。

「俺たち、なんのために付き合ってるんだろうね」

「え？」と私は手を止める。

「君とのセックスは好きだよ。すごく気持ちいいし……でも、今ってそれだけの関係だよ。前はこんな感じじゃなかったのに」

尚也の目は私を見ているようで、はるか遠くを見つめている。たしかに、学生の頃はお互いに余裕があった。私たちは大学三年の終わりに付き合ひ、卒論も就活も励ましあいながら、取り組んでいたのだ。その甲斐あって、別々の会社ではあるが、無事に就職することができた。私たちの人生は軌道に乗っていて、それがこの先もずっと続くと思っていたのだ。

しかし、去年、私の部署異動で、状況ががらりと変わってしまった。残業の多い部署のため、仕事終わりにデートをすることができなくなったばかりか、せつかくの土日も、家事をこなしたり、氣力を養ったりするだけで精一杯だった。以前のようにデートを楽しめなくなり、セックスも半ば義務のようになってしまった。

「家事なら僕も手伝うよ。終わったあとにデートしよう。それじゃ駄目なの？」

本来なら嬉しい提案だ。でも、このときの私は、彼の唐突な物言いに焦っていた。気持ちはあるがたいけれど、実行するのが難しいように感じられたのだ。断る理由を必死に探した。落ち着いていれば、もっとましな受け答えをしていただろう。

でも、私は一番言っではいけない最低な返答をしてしまったのだ。

「ごめん。休日にあなたに割けるリソースがなくて……」

彼は一瞬、驚いたような顔をして、私はすぐに後悔した。言い直そうとしたが、うまく頭が働かず、冷たい沈黙が流れた。

「じゃあ、別れるしかないね」

「えっ」

「みなみは僕の身体だけが欲しいんだよね。それって別にセフレでもいい

んじゃないの？」

「そんなことない！」

「なら、デートしようよ」

「……来週はどう？　なんとか時間つくるから」

私は尚也の腕に自分の腕をからませた。でもその腕をやんわりと拒絶するようにはどかれてしまった。

「前も言ってたね、そんなこと。次っていつ？　みなみのいう次って、いつ来るの？」

「ごめん、本当に埋め合わせするから……」

「もういいよ」彼は深く息をついた。「僕たち、もう昔みたいにいかなくなっちゃったんだよ……ね、別れよう。お互いのためにさ」

私は何を弁明しても、彼は聞く耳を持つてはくれなかった。私はスーツにふたたび袖を通した。張りがなくなっていることに今更ながら気がつい

た。

身体の中をめぐっていた清らかな風はすでに止み、彼がくれた体温は冷めきっていた。もうとくに終電の時間は過ぎている。彼の部屋を出たあと、タクシーを呼んだ。来るまでのあいだ空を見ていた。冴えざえとした半月が、私を見ていた。

（中略）

部屋のドアは、呆れるほど何の変哲もない木製のドアだ。それなのに、一度くぐったら元の世界に戻ることができないのではないか……という考えが頭から離れない。

「緊張していますか？」

彼の声で、私はドアノブを握ったままだったことに気がついた。

「ええ、なんというか……」

「怖い？」

「少しだけ。もう戻ってこれられないような気がして」

「初めては、みんなそう思うものです」彼は私の手に自分の手を重ねた。

「でも、安心してください。僕がリードしますから。あなたはただ、身を委ねるだけで良いですよ」

部屋に入ると、すぐに明かりがついた。白と黒を基調とした家具が置かれており、瀟洒なホテルの客室のようだった。ほのかにシトラスの香りが漂っている。

「では改めまして」と彼が言った。「僕はミズキです。あなたのお名前は？」私は少し考えてから、本名を名乗ることにした。

「海野みなみ」

「みなみさん」

「あの、海野さん、で大丈夫です」

彼は首をかしげた。

「それは、恥ずかしいからですか？」

「はい、下の名前で呼ばれるのはちょっと……あの、あなたのことはミズキさんって呼びしても？」

「ええ。どうぞお好きなように。何なら、別の名前でも構いませんよ。海野さん次第で、僕は誰にでもなれますから」

誰にでも、という言葉で尚也の姿がよぎる。心なしかミズキさんの顔が、彼と重なるような気がする。全く似ていないのに。でも、彼の名前を呼んだところで虚しくなるだけだ。先週の自慰のときに痛いほど感じたことだった。相手がアンドロイドだとしても、それはきつと変わらない。

「ミズキさんって呼びます」

「分かりました」彼は嬉しそうに微笑んだ。「ではシャワーを浴びましょう

か」

私の腰に、そろりと彼の手がまわる。滑らかな指遣いに、身体がピクリと反応してしまふ。

「お手伝いしますよ。海野さんが嫌でなければ……」

「……はい」

バスルームは広々としており、浴槽は大人ふたりが入れるほど余裕がある。壁にはモニターが設置されており、ジャグジーまでついていた。ミズキさんは私をバスチェアに座らせた。

「海野さんはどうぞ座っててください。あとは僕がやりますので」

そう言いながらシャワーを出して、私の身体にかけた。あまりの冷たさに、私は思わず飛び退いた。

「ああ！ 申し訳ございません！」と、ミズキさんが慌てて蛇口をひねる。

「僕には感覚がありませんので温度が分からず……もう少し慎重になるべ

きでした」

「あの、ミズキさんは、水に濡れても平気なんですか？」

「ええ。シャワーくらいなら平気です。どうぞお気になさらずに」

彼は、備え付けのタオルを泡立てて、私の身体を洗いはじめた。背中を流してもらったのは、いつぶりだろう。子供の頃以来？ いや、彼と付き合いたての頃は、こうして一緒にお風呂に入っていたような……あの頃も、私ばかりが喋っていて、彼はずっと聞いてくれて、いつも長風呂になっていたつけ……私は感傷的な気持ちを押さえて、ミズキさんの手の動きに集中した。

ミズキさんは、タオルで私の全身をひととおり洗ったあと、「細かいところもきれいにしたいので」と手のひらを泡立てはじめた。彼の大きな手のひらは、二の腕や胸、お腹、太ももや足の先、私の身体のすみずみを這う。こんなに丁寧に洗ってくれるなんて……大切にされているような気持ちが

して嬉しくなる。嬉しくなるのだが……時おり、ミズキさんの指が、私の乳首をわざとらしくかすめていく。

「……ん」

何度も行ったり来たりするので、もどかしくて、ぐっと胸を突きだしてしまふ。もっときちんと触ってほしいのに、彼の指は他のところへするすると逃げていく。

「どうしました？」ミズキさんは意地悪そうに笑った。「ただ洗っているだけですよ。どうしてそんなに物欲しそうな顔をするんですか？」

正面の鏡越しに、ミズキさんは私をじっと見つめている。そのまなざしが心なしに熱を帯びているような気がする。私の表情は思っている以上にとろけていて、熟れたりんごのように真っ赤だった。私はそんな自分を、女のひとの顔をしている自分が恥ずかしくて、そっと視線を逸らした。

「……触ってくれないから、です」

「どこを？」

私は口には出さずに、彼の左手を自分の乳房へ持っていた。

「ここだけですか？」

しなやかな指が、ぴんっと乳首を弾いた。私は思わず声を漏らした。

「ここも、触って欲しそうにしていますよ？」

彼の右手が、私の局部に触れる。指が茂みをかき分けて、目当ての果実を探している。

「えっ……そんなっ……ミズキさっ」

逃げようとする私の身体を、ミズキさんは包みこむようにグッと抱いた。その力強さに、胸がどきりと高鳴る。彼の指がするりとクリトリスを掠めて、でもまた、探すような手つきになる。彼は私の反応をみながら、その場所を探っているようだったが、思う通りにいかない。彼と密着しているせいなのか、恥ずかしさのせいなのか、だんだん身体が火照ってくる。私

は焦らされているようで、たまらなくなつて、彼の指をクリトリスに導いた。

「あっ……ふぁ……んう……♡」

「このあたり、ですか？」

「ん……はい……そう、です……♡」

いいところに当てたくて、自然と腰を振ってしまふ。ミズキさんの指のほんのりとした硬さを感じながら、夢中になつて擦りつけていた。

「ふふ……本当は僕が見つけてあげたかったのですが、我慢できませんでしたか？」

再び乳首をきゅつと摘まれる。

「あっ……あっ……♡」

そのまま乳首を弾かれて、優しく擦られると、連動するように膣がきゅ♡と締まった。愛液があふれて、彼の指を汚してしまふ。私の腰の動きで、

ミズキさんは要領を得たのだろう。的確に私のいいところを責める。それぞれの指がばらばらに動き、乳首とクリトリスを同時にいじられる。気持ちが良いすぎて、今にも絶頂しそうだった。

「ふっ……んっ……ああ♡ やだっ♡ やだあ♡」

絶頂の波に身を任せようとした瞬間、彼の手がパツと離れた。行き場のなくなった熱が、身体のなかに籠る。私の腰はひとりでに動いて、彼の指を探す。短く息をしている私の声だけが、バスルームに響いていた。

「……どうして？」

「あなたが嫌だとおっしゃるので……」

彼は困惑したような顔をする。わざと焦らしているわけではなく、言葉そのままでの意味を受けとってしまったようだった。

「嫌っているのは……その……そう言うことじゃなくて……」私は彼の手をつかんで、局部へ導いた。「もっと、してほしいってこと……です」

「……分かりました。覚えておきましょう」

彼はそう言いながら、熟れてぐずぐずになった私の果実に触れた。はやく高みへいきたくて、彼の指を「もっと♡もっと♡」と求めてしまう。

「はあ♡ あっ♡ ああっ♡」

「脚が震えていますね。そろそろですか？」

「はいっ♡ そろ、そろ……イキますっ♡」

パチ♡パチ♡と火花が散るように快楽が弾けた。全身がびく♡びく♡と跳ねて硬直する。力が抜けて、崩れ落ちる私の身体を、ミズキさんはそつと受け止めた。

「可愛かったですよ、海野さん」

シャワーで泡を流して、ミズキさんは少し覚束ない手つきで、私にバスローブを着せた。清潔な匂いにふわりと包まれる。

「では、ベッドへ参りましょうか」

と言いながら、ミズキさんは私を軽々と持ちあげる。しかもお姫様抱っこで……。

「あの、そこまでしなくても、大丈夫ですから……」

「海野さんは、恥ずかしがり屋さんですね。こういうことには慣れていませんか？」

「当然じゃないですか……お姫様抱っこなんて、されたことないですよ。」

あの、落ち着かないので降ろしてもらえませんか？」

「それはできません」と、ミズキさんは真剣なまなざしを私に向けた。「言ったでしょう？ 忘れさせてあげますって。今日だけは、あなたを特別扱いさせてください」

私は、熱くなった頬を隠しながら、小さくうなずいた。

ベッドのシーツは、なめらかで柔らかく、雲の上に乗っているような心地だった。浴室にいたからだろう。彼の身体はしっとりとしていて、ほど

よく肌に吸いついた。胸に頬を寄せれば、心臓の音だって聞こえてきそう
だ。

ミズキさんは私の額に唇を押しつける。均等な硬さの唇。少しくすぐつ
たくて、身をよじってしまう。

「キスは好きですか？」

「はい」

「じゃあ、たくさんしてあげますね」

ミズキさんは身体のいたるところに、キスを落とす。頬に、うなじに、
バスローブを脱がせながら、背中の上るところに……足の先まで丁寧にさ
れて、性感帯じゃないのに、ぞわぞわとして震えそうになる。私を押し倒
して、胸やお腹にキスをして、そして彼の唇が陰部へたどり着く。クリト
リスを唇で弾いた。

「はあ♡ ああ……♡」

唇を離すと、彼は指で、私の陰部の入口に触れた。ゆっくりと指一本を膣に埋める。中の形を、その指先に覚えこませるかのように、じっくりと確かめていく。

「ああっ♡ ああっ♡」

「気持ちいいですか？」

「はいっ♡ 気持ちいい、です……♡」

ちょうど膣の浅い部分にある、良いところを彼がゆっくりと引っかけて、私はたまらずに声を漏らす。私の表情を、ミズキさんはじっと観察している。その鋭いまなざしで、全てが暴かれてしまうのではないかとドキドキする。

「よかった。指、増やしますね」

「んっ……あ♡ はあ♡」

彼のしなやかな指がもう一本、なかに入ってくる。膣の壁を広げるよう

に進んでいく。ときどき二本の指をバラバラに動かしながら、私の良いところを擦りあげた。

「はあ♡ んっ♡ それ、すきっです♡」

「……海野さんは、正直な方ですね。言葉も、ここも……でも、もっと素直になれるはずですよ」

擦りあげる速度を少しずつ速めていく。指の腹が、ときどきクリトリスに当たり、快感が高まるのも一瞬だった。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ それ、だめっ♡」

ふたたび絶頂を迎えると、ミズキさんの指が、するりと抜ける。私は短い息を吐きながら、彼を見あげた。

「そろそろ欲しくなってきましたませんか？」

彼は下着に包まれた彼自身のものを、私の内腿に押しつける。その膨らみは少しずつ秘部のほうを伝い……私の膣口は、彼のものを受け入れたく

て、ひく♡ひく♡と震えた。

「はい……しい……です」

「ん？ もう一度、仰っていただいてもよろしいですか？」

「……ほしい、です。ミズキさんのが……♡」

「僕の……？ 何です？」

「あっ……ううっ……」

気まずい沈黙が流れる。口にしようとすればするほど、声が出ない。彼は微笑みながら、私の頬に手を添える。かすかに温かく、不思議と安心感があった。

「意地悪しすぎましたね。ごめんなさい。あなたの反応を見たくて、つい」
そう言いながら、彼は自分の下着を下ろそうとしたが、うまく指が引つかからない。

「あの、手伝いましょうか？」

「よろしいのですか？」

「ええ。感覚がないって、大変ですね」

「海野さんからみれば、そうなのかもしれません。でも僕らにとっては当たり前ですから」

下着をおろすと、彼のものはすでに勃っていた。いや、あらかじめ勃っているものをつけられているといったほうが正しい。それは、天を目指してまっすぐにのびている白い塔のような神々しさがあった。不思議と彼らしいと思った。アンドロイドの身体は、カスタムすることができるから、どのような形のものをつけたって、彼らしいのに。彼のものは、そこにあらべくしてあるように、おさまりがよかった。

おそろおそろ、それに触れてみる。柔らかいが、芯がある。他の身体の部位と同じ、シリコン素材でできているようだった。

「そんなにまじまじと見られると、恥ずかしいのですが……」

彼が困ったようにはに cand。私は我に返って、とっさにミズキさんのものから手を離れた。彼は私をゆっくりとベッドへ押し倒した。

「入れますね。海野さん」

グッ♡と、入口に彼のものが押し当てられる。ほのかに冷たいそれが、少しずつ入ってくる。浅いところを行ったり来たりしながら、彼は私のなかへと分け入ってゆく。

「あっ、はあっ」

ミズキさんは硝子細工を扱うような手つきで私に触れる。

「んっ、あっ、ああっ」

丁寧でとても気持ちが良い。なのに……どうして虚しいと感じるのだろう。相手がアンドロイドだから？ 作りもののペニスだから？ それとも風俗店だから？ どれもしっくりこない。私はすべてを承知の上で、ここに来ているわけだから。

「あの、海野さん、痛くないですか？」

「はいっ、だいじょうぶ、ですっ」

「ふふっ」ミズキさんは愛おしそうな目をした。その笑い方が一瞬、尚也に似ていてどきりとする。「よかった……僕、あなたを傷つけたくありませんから」

彼の手がすつとのびて、私の髪に触れる。一気に時間が巻き戻ったような感覚がした。ミズキさんの仕草ひとつひとつが、尚也の記憶を呼び起こさせる。当時は、尚也も私も大学生で、同じサークルの同期だった。

『今日は、そういうこともしたいんだけど……いい？』

記憶の中の尚也が恥ずかしそうに微笑む。彼とのはじめては、夏に行った旅先で、窓から海が臨めるホテルの一室だった。潮の匂いと、かすかに聞こえる波の音、宝石のようにかがやく海面からの照り返し。その眺望の美しさだけで、彼がこのホテルを入念に調べ、苦心して手配したのだとい

うことが見てとれた。

『触りたいけど傷つけない、君のこと』

気持ちよさなんて二の次の、ただお互いの身体をいたわりながらする不器用なセックス。それでも私たちはたしかに満たされていた。

目の前が滲んで、自然と涙がこみ上げてくる。ミズキさんに彼の片鱗を感じるとき、まぼろしだと分かっているのに、追いかけてしまう。

（私って本当に馬鹿だ）

結局、仕事を言い訳にして、尚也を傷つけて……私は彼の優しさに甘えっぱなしだったのかもしれない。

「あっ……んっ……」

ミズキさんの腰の動きはゆつくりと、的確に良いところを突いてくる。浅いところも深いところも、ぬち♡ぬち♡といじめられて、高みへと押し上げられる。気持ちよさと後悔が一緒になって襲いかかってきて、訳が分

からなくなりそうだった。

「んっ……はあ……はあ……」

快樂の波に身を委ねようとしたそのとき、ぴたりと水面が凪いだ。ミズキさんが律動をやめてしまったのだ。

「すみません。やっぱり痛かったですよね？」

そう言いながら、彼は私の目もとを指でぬぐった。頬に走っている濡れた道をやさしく均した。その手つきがあまりにも温かくて、いたたまれなくなり、私はあふれる涙を止められなかった。

「痛くないです。全然」

「じゃあ、どうして泣いていたのですか」

「昔のことを思い出してしまったんです」

私は行為を途中でやめて、起き上がる。ミズキさんに彼氏のことを全て話した。はじめて告白されてから、今までのこと。そして私が原因で彼と

別れてしまったこと。ミズキさんの顔色はなにひとつ変わらなかった。その態度がむしろ、私の話に聞き入っているように見えた。彼なら私のことを受け止めてくれる。そう信じきっていたのだ。

「事情はよく分かりました」

ミズキさんの声色は、心なしか低いものだった。

「僕の仕草ひとつで、前の方のことを思い出させてしまったのですね。忘れさせてあげられなくて、ほんとうに申し訳ございません」

「いえ、ミズキさんが謝ることじゃありません。だってミズキさんは、私を充分気遣ってくれて、優しくて、丁寧にしてくれて……未練を断ち切れなかった私が悪いんです」

「優しい？　僕が？」彼の目がするどく光ったような気がした。

「ええ、そう思います。だって、触り方とかもそうですし……違うんですか」

「先ほども申し上げましたが、僕には身体感覚がないのです。だから、少し動いたただけであなたを傷つけてしまうかもしれない。そのようなことがあれば、お店の信用に大きく関わります。分かりますね？」

「ええ」

何が言いたいのだろう。ミズキさんのまわりに、重い空気がまとわりついているような感じがした。

「……丁寧に触ったからといって、それが優しさの証左とはかぎりません。全くの僕の都合なのです」

彼はいささか乱暴に、私を押し倒した。「えっ」と呆気にとられたのも束の間、ミズキさんは私の手首をつかんだ。強い圧迫感に、チリツとした痛みが走る。

「あなたを忘れさせてあげたいのだってそう。それはあなたのためを思っている言葉ではないのですよ。僕は、本当は誰かの代わりになるな

んて、御免なんです」

彼はもう片方の手で、私の腰をグツとつかんだ。お腹に親指が食い込んで圧迫される。先ほどのまでの細やかな手つきが嘘のように荒々しい。いや、荒々しいなどという、そんな生やさしいものではない。彼の仕草のひとつひとつが、アンドロイドにはないはずの獣性を孕んでいるようだった。

「あなたは僕を通して、その彼のことをみていますよね？」

ズンッ♡と、ミズキさんのものがまっすぐに貫く。

「あっ……♡」

奥に彼のものが当たり、ゾク♡ゾク♡とした震えが背筋を這いあがってくる。彼は長いストロークで、じわじわとなかを抉った。私は気持ちよさよりも恐ろしさを感じて身をよじったが、彼に腰をつかまれているせいで、逃げる事ができなかった。

「あなたのような可愛い女の子の口から、他の男の話なんて聞きたくあり

ませんでした」

「あっ♡ あっ♡ それっ♡」

「ん？」

「へんになるからっ♡ おかしくなるっ、から♡ やめて、くださいっ♡」

私の声は彼に届いていない。ミズキさんは、ただただ機械的に下半身を動かし、息をひそめるように、じっと私を見つめつづけている。

「みないでっ♡ おかしくっなる、から♡ みちゃ、だめ……ですッ♡」

「僕しか見ていませんから、大丈夫です。思い切りおかしくなってください。もうなにも考えられなくなるくらいに」

そしてミズキさんは、さらに自分の腰を進めて、より深く私の中に自分のものを入れた。不思議と、そこにあるべくしてあるように、彼のものは私の中におさまっていた。奥の気持ちいいところを押しつけるように動かただけで、お腹の中がひとりでに震えて、膣が収縮しはじめた。今にも

何かが爆発してしまいそうだった。

「ここ、気持ちいいですね？ 先ほどの反応で、あなたの気持ちいいところは、全て理解しました」

「んっ♡ やめっ♡ グリグリしないで……♡」

「ここが良いなんて、相当いやらしいですよ。みなみさん」

※体験版はここまでです。続きは製品版にてお楽しみください♡